

ゼミ教育における教育演劇の実践と効果
— 演劇ワークショップからホールでの上演発表会へ —

Practice and Educational Effects of the Drama
Workshop in a Seminar Class
— Workshop and the Students'
First Staging in the Hall

中山 文¹ 桂 迎²
Fumi Nakayama Gui Ying

(要約)

近年、演劇の表現手法を通してコミュニケーション能力を育成しようという試みが学校や地方自治体で頻繁に行われている。中山も2016年度に3度目の共同研究として中国の学生演劇指導の第一人者である桂迎(浙江大学教授)とともに、教育現場における演劇教育の可能性を探った。授業は、中山ゼミの受講生を対象に2016年4月から6月にかけて行い、最終的に上演発表会で締めくくった。

本稿は、そのワークショップの具体的内容、授業の観察・考察、授業の意図と発表会についての評価、授業についての振り返りの作業をまとめたものから構成されている。結論的には、上演発表会を設定したことにより、学生たちに多方面の教育効果が確認できた。

キーワード：教育演劇，創造，グループワーク，コミュニケーションスキル，プレゼンテーション

1. 人文学部人文学科

2. 浙江大学

1. はじめに

近年、演劇の表現手法を通してコミュニケーション能力を育成しようという試みが学校や地方自治体で頻繁に行われている。劇作家・演出家の平田オリザ氏は「演劇はどの子どもにも居場所を作り、意欲や自信を持たせる効果がある」と語り、「演劇は学校教育をサポートする力を持つ」¹と断言する。とくに大学教育においては、北海道教育大学など4教育大学が共同で「演劇的手法による教員養成課程の学生並びに現職教員のコミュニケーション能力育成プロジェクト」を立ち上げている（平成26年から28年度まで）ように、教育学部系で注目を浴びている²。

私たちがこれまで学生の積極性やコミュニケーション能力向上を目的に、ゼミ教育で演劇的手法を運用する共同研究を2度行ってきた。2007年には主に体を使った2回の演劇ワークショップが学生にどのような影響を与えるかを主たる考察目的とした（中山2008）。2012年には4回のワークショップを行い、5回目に「信頼」を共通テーマとした演劇発表会を行った（中山2013）。

その結果、私たちが得た考察・反省は以下の3点にまとめられる。

- ① 学生の共通した感想として、「物語作りの楽しさ」「グループワークの楽しさ」「新しい自分の発見」「他者の観察と理解」があげられた。演劇ワークショップを通してゼミに親密な雰囲気を作るという当初の意図は達成されたと考える。
- ② 大多数の学生が「他の授業ではできない経験ができた」という喜びを語る中で、最後まで「自分が他人にどのように見られているか」という緊張が解けない学生もいた。このような内向性を個性として持つ学生にとって、演劇ワークショップは何ができるのか。
- ③ 教育演劇の目的は「上手に演じること」ではない。だが授業の一環として行う場合には、どこかのポイントで試験（上演）をすることが必要となる。その過程で学生が心に不要な傷を受けないように、どのような評価基準を設けるのか。

2016年、私たちは3度目の共同研究の機会を得た。今回は5回の演劇ワークショップを授業で行い、6回目に各班が上演を行うこととした。上演作品の共通テーマは2012年と同じで「信頼」としたが、上演発表会を行う場所を変更した。2012年は普段授業で使っていたフィットネスルームで行ったのだが、今回はマナビーホールという大きな舞台での上演を課した。それは「観客がいてこそ成立する演劇が学生の意欲や積極性に与える影響を確認するには、それにふさわしい晴れの間を用意すべきだ」と考えたからである。学生たちはそのことを受け入れ、舞台上がる日を目標に毎回の授業を受けてくれた。拙論はその実践記録と考察である。

2. 2016年「信頼ワークショップ」の授業概要

今回桂は2, 3, 4年次生の中山ゼミで同じ授業を3度繰り返した。いずれの学年も16

－ 17名で、中山が文学・文芸領域に所属するため、ゼミ生にも比較的文学好きが多い。だが演劇については大半が未経験で、舞台に立った経験どころか、劇場で演劇を見たこともない学生が大半を占めている。

人文学部では2年次生後期から始まる専攻演習（ゼミ）のクラスが卒業まで継続する。そのため2年次生は基本的に初顔合わせだが、3年次生は半年間を、4年次生はすでに1年半を同じゼミ生として過ごしている。親密性の異なる背景で同じ演劇ワークショップを行った場合、どのように異なる結果を見せるのか。どの時点で行うのがもっとも教育的に効果があるのか。それを明らかにするために各学年で同じ授業を行った。以下に桂の授業概要を記す。実施月日時限と写真は、3年次生のものである。

(1) 第1回の授業（4月13日3限） テーマ「ようこそ教室劇場へ」

- ・ イントロダクション：自己紹介、本授業の目的、方法について。
- ・ 授業の目的：自分の教養を掘り起し、コミュニケーション・イマジネーション・プレゼンテーション能力を養い、想像する力を開発すること。
- ・ 方法：毎回テーマを持った演劇ワークショップを行う。学生はグループでトレーニングを行う。最終的にはグループで小品を完成させてその楽しさを共有すること。
- ・ 簡単なアクティビティを実施。
- ・ 次回の宿題は「自分の星座・出身地を身体で表現する」。

(2) 第2回の授業（4月20日3限） テーマ「注意力を集中すること」

- ① ウォーミングアップ：水になる（写真①）
 - ・ 水滴 ・ 0度の水（氷） ・ 100度の水 ・ 水蒸気 ・ 小川 ・ 大きな川 ・ 海
 - ・ 大波
- ② 宝探し：前もって教室に隠されていたティーバッグ8つを探し、班ごとに数を競う
- ③ 「鏡」：2人1組。1人は鏡に向かう私、もう1人は鏡に映る私。（写真②）
- ④ 「影」：4人1組。1人に対して3人分の長い影ができる。（写真③）
- ⑤ 「捨う・引っ張る・押す」：班ごとに、動きだけで物語を表現する。（写真④）
- ⑥ 前回の宿題発表「自分の星座・出身地を身体で表現する」。
次回の宿題は「顔を洗う」を動作で表現する。



写真①



写真②



写真③



写真④

(3) 第3回の授業（4月27日3限） テーマ「感じ取り信念を持つこと」

- ⑦ ウォーミングアップ：鶴になる（写真⑤）
 - ・ 飛翔・着地・餌を食べる・水を飲む・仲間の羽繕い・仲間と一緒に飛翔
- ⑧ モノを別の何かに見立てて表現する
 - ・ ペン：タバコ，口紅，ダーツ，櫛，剣，タクト，視力検査など（写真⑥）
 - ・ 椅子：車，ショッピングカート，ボート，カーリング，機関銃など（写真⑦）
- ⑨ 五感表現：2人向き合い、「触覚・聴覚・味覚」を表す動作で自分の意図を伝える。
- ⑩ 扉の向こうに：与えられたテーマに従い，扉を開けて始まる物語を言葉なしで表現するグループワーク。
 - ・ お誕生日会・授業に遅刻する・コンサート・お葬式（写真⑧）
- ⑪ 前回の宿題発表「“顔を洗う”を動作で表現する」。
次回の宿題は「母親観察」。「“あなたが外出するときに，お母さんがしていること”を動作で表現する」。



写真⑤



写真⑥



写真⑦



写真⑧

(4) 第4回の授業 (5月11日3限) テーマ「交流と適応」

- ⑫ ウォーミングアップ：4人ずつの4組。各班が縦隊になり先頭の動作を真似る。掛け声の番号に従い、全員が同じ動作を行う。全員で大きな円を作って歩きながら指示された番号の動作を行う。(写真⑨)
- ⑬ スローモーション：二手に分かれ向かい合う。中間地点まで歩き、落ちている石を拾い、目の前にある川に投げる。両方から同時にスタートする。石はどの程度の大きさか。どのような投げ方か。投げ終えた後のポーズで停止する。ここには自分一人しかないと考える。その動作をスローモーションで行う。
- ⑭ 前回の宿題発表「母親観察」。
- ⑮ 1人1単語を決め、ペアで物語を作る。自分と相手の2つの単語しか使用できない。
- ⑯ 4人4班に分かれ、先ほどの単語を使って物語を作るグループワーク。



写真⑨

(5) 第5・6回の授業 (5月18日と25日 3限) テーマ「リハーサル」

- ・ 発表上演会に向けたチェックを行う

3. 観察と考察

(1) 第1回の授業

桂が50枚以上のPPTを用いて本授業の目的、方法、評価基準を伝え、中山が通訳を行った。まず授業の目的は「自分の教養を掘り起し、コミュニケーション・イマジネーション・プレゼンテーション能力を養い、想像する力を開発する」ことであるとした。授業の方法は「毎回テーマを持った演劇ワークショップを行い」「学生はグループでトレーニングを行い」「最終的にはグループで小品を完成させてその楽しさを共有する」ことである。ここで行うのは一般学生を対象とした「教育演劇」の授業であり、演劇の専門家を作る「演劇教育」ではないことを強調した。

最終課題がグループ別的小品発表であることを宣言したが、授業の最終目的は「全員で一つの有意義なことを成し遂げる」ことであり、「一緒に作品を作り上げる喜びを共有」することである。「上手いか下手かを問わないし、作品のレベルを競うコンテストではない」

という説明を繰り返し行った。

今回の授業が導入となり、これまで演劇経験を持たない学生たちも動揺することなく次回からのカリキュラムに参加できたと考える。また、学生たちは中国の大学生演劇にたいへん興味を惹かれたようで、PPTの舞台写真を食い入るように眺めていた。

講義後に、1本のペンを隣り合う2人が指先で押さえて連結するというアクティビティを行った。隣のペアとつながり、徐々に列を長くするというものだ。体を動かすゲームを試みることで、学生たちは次回からの演劇ワークショップに対して期待を膨らませたようだ。最後に宿題が出された。「自分の星座または出身地を身体で表現する」。「えー!？」の声が上がった。

(2) 第2回の授業

テーマとなっている「注意力」とは、模倣のモデルとなる他者に向けるものだけではなく、生活における自分の行動に向けるものでもある。学生の行動でもっとも印象的だったのは②の宝探しだった。①では周囲の目を意識してなかなか動けなかった学生たちが、②では班ごとに競い合ううちに歓声をあげ、いっきにクラスの雰囲気が和やかになった。8つの宝物がすべて発見された後、桂が「宝物を探しているとき、自分がどんな格好をしているか、気になりましたか? (学生たち首を横に振る。)それが注意力を集中させている状態です」と解説した。③では鏡の前で動けない学生に対して、「突拍子もない動作をしないこと。鏡の前で毎日している動作を思い出して」というアドバイスを行った。④では、多人数で行う同じ動作に明るい笑い声上がり、集中する様子が見えた。

⑤では初めて班ごとに相談する時間が設けられた。3年次生のある班が「捨う」をテーマに、友達が落としたコンタクトを皆で探し出すというストーリーを表現した。言葉がなくてもよく分かる作品だった。だが捨ててもらったコンタクトをそのまま装着していたことを指摘され、本人は初めてそのことに気がついた。これを機に、学生たちは求められているものが単なる動作ではなく、生活の再現であることに気がついたようであった。

(3) 第3回の授業

テーマは「信頼(信念を持つ)」で、虚構の設定を本物だと信じて演技をする練習である。アクティビティの難度が高くなる第3回と第4回では、授業後に数分間でコメントシートを書いてもらった(資料参照)。

今回行った⑦から⑪のアクティビティの中で【もっとも面白かった・もっとも難しかったもの】について、3学年(2年次14人、3年次17人、4年次11人)の答えを集計した。以下、その数値をもとに考察を加える。

【もっとも面白かったもの】ではグループワークの⑩が突出しており、42人中24人(2年次9人、3年次9人、4年次7人)がこれをあげた。他のアクティビティはそれぞれ0から5人に分散した。【もっとも難しかったもの】では「言葉なしで五感を表現する」の⑨が20人(2年次7人、3年次4人、4年次9人)と突出している。⑩の特徴は、「グループ発表であること」と「言葉による相談が許可されたこと」である。動作だけの⑨では伝

えたいことが伝わらないもどかしさを抱えていた彼らが、⑩で与えられた1分間に極めて集中した議論を行った。その結果、【自分の意見を発言できましたか?】の問いに35人(2年次12人, 3年次14人, 4年次10人)が「できた」と答えている。普段自分の意見を積極的に発言しない学生が、言葉をもつことの喜びに目覚めたかのように発言していた。

【もっとも難しかったもの】に⑦をあげた人が8人(2年次2人, 3年次6人)いた。「鶴の動きなんてしっかりと見たことも考えたこともなく, わからなかった」という感想もあった。桂は「鶴」ならば日本人にとっても見慣れていて動きの表現もしやすいだろうと考えたのだが、学生の認識とはズレがあったようだ。中山はかつて同様の経験をしている。

2003年に北京人民芸術劇院の著名演出家李六乙が伊丹アイ・ホールで関西の小劇場俳優を相手にワークショップを開いた。そこで「能の動作」を指示された日本人俳優たちが立ち往生してしまうというハプニングが起こった。李氏はけっして彼らを困らせようとしたのではない。中国ではプロを志す話劇俳優たちはみな演劇大学出身者であり、学生時代に必ず京劇の所作を学んでいる。そのため李氏は日本の俳優も、当然能楽や狂言の所作を学んでいるものと考えたのだ。だが日本の小劇場俳優で古典演劇の動きを身につけている者は極めて稀である。このように、海外のファシリテーターは文化の違いから無意識のうちに参加者へのハードルを上げてしまうことがあるので、注意が必要である。

⑧のペンについては全員が二巡するほど次々にアイデアが生まれたが、椅子については難しく、最後の一人がなかなか動けなかった。本人は友人の視線を感じてどんどん焦ってくる。ファシリテーターとしては、このようなときにどんな言葉をかけてどれくらい待つべきなのかが難しく、自らの課題となった。

【困ったことがあれば教えてください】には「・想像力のレパートリーがない(3年次)・恥ずかしさに負けてしまう(3年次)・思ったように身体が動かなかった(3年次)・自分の殻が破れない(3年次)・面白い発想ができない(4年次)」と自分を責める意見が目についた。だが同時に、【発見があれば教えてください】では全学年から「・言葉を用いず、相手に何かを伝えることの難しさ」があげられた上で「・洗顔の仕方を通して、日常を気にするようになった(3年次)・日常生活の中でも、注意力や観察力が必要(2年次)・同じ動作でも、人によって多種多様。じっくり観察してみると面白い(3年次)」と自分や他者を観察することに注意が向き始めている様子もうかがえた。さらに「・グループで役割を決め、皆で1つのことをすることで団結力が生まれる(2年次)・人と仲良くなるには、同じ目的や目標があるとよい(2年次)」という本質的な意見も散見された。

【友人との関係に変化はありましたか?】には「・もっと仲良くなれた(2, 3, 4年次)・以前よりも会話が増え、自然体でいられるようになった(3年次)・友人の新しい面を見つけられた(3年次)」と、いずれの学年でも親密さが増したことを感じさせた。

(4) 第4回の授業

今回は36人(2年次12人, 3年次16人, 4年次8人)の参加だった。⑯のアクティビティを31人(2年次10人, 3年次14人, 4年次7人)が【もっとも面白かったもの】にあげ、32人(2年次10人, 3年次14人, 4年次8人)が【もっとも難しかったもの】

にあげた。⑯は異なる1単語しか話せない4人が集まって物語を作るというグループワークである。もっとも演劇の形に近いアクティビティがもっとも面白く、もっとも難しいのは当然のことだろう。

【発見があれば教えてください】では「・同じ言葉でも、シチュエーションによって、全く異なる意味を持つようになる（3年次）・抑揚のつけ方で、表現が大きく違ってくる（3年次）・どんな小さなことでも、想像を広げれば何でもできる（3年次）・演じるのは難しいけど、楽しい（4年次）」と演劇の魅力に気づき始めている様子が見えられた。

【友人との関係に変化はありましたか？】では「・以前より仲良くなれた（2, 3, 4年次）・今まであまり話すことのなかった人とも、話すようになった（2, 3, 4年次）・意見を言い合って、想像力を膨らますことができた（3, 4年次）・笑顔が増えた（2年次）」という回答が寄せられ、コミュニケーションを取りながら全員で一つのものを作る楽しさを共有する様子が見られた。

（5）第5・6回の授業

第5・6回の授業では、班ごとのリハーサルに桂が演出家としてアドバイスを行った。そこで台本に行き詰った3年次のT君から「先生、信頼っていったい何なんでしょうか？」という根源的な質問がなされるということもあった。こうして6月の発表会に向けて各班は順調に滑り出した。

4. 演劇ワークショップの意図と過程

（1）授業目標

毎回のワークショップでは1つのテーマとなる言葉をめぐって様々な演技の練習が行われた。各ワークには一定の関連を持たせ、学生に演技の質や能力は求めない。学生に求めるのは参加度と関心度である。最終的には練習を積み上げてお互いの発表作品を楽しむことを目標とする。各回の授業テーマを、A. 注意力を集中すること、B. 感じ取り信念をもつこと、C. 交流と適応と設定した。

A. 注意力を集中すること

注意力を集中する目的と効果には次のことが考えられる。演劇の第一の特徴は、俳優の身体が創作の材料であり道具であり、作品の体现者となることだ。第二の特徴は、俳優はつねに仮定のフィクションの中で創作を行うということである。そのために俳優は注意力を役柄に集中し、相手との交流に集中せねばならない。そうすることで「群衆の中の孤独」が達成でき、緊張から解放されて創作に没頭することができるのである。

B. 感じ取り信念をもつこと

演劇が作る仮定のフィクションの中では、俳優は偽物を本物に見せなければならない。そのためには俳優にリアリティと信念が必要である。俳優がストーリー・劇中の環境・与えられた境遇・人物関係・発生した事件に対して、リアリティを感じ取りそれを信じる強烈な信念を養成すること。それが演劇の基礎的訓練として非常に重要となる。つまり、イ

マジネーションがなければ創作は存在しえないのだ。イマジネーションを豊かに、具体的に、鮮明に、活発に働かせてこそ、演技は行動性と創造性に富み、強烈な感染力を持つのである。

C. 交流と適応

① 自分自身との交流、相手との交流、観客との交流

交流とは俳優が演技の最中に相手との間で行う思想、感情、意志、願望、動作などについての相互伝達、相互作用、相互影響を指す。そこには俳優の自分自身との交流、観客との交流も含まれている。

② グループとの交流と社会適応

グループとの交流とは集まった学生たちがその場で即興表現を考えることを指す。練習では舞台の焦点を定めることと、合理的で明確なきっかけが不可欠である。

まず人物の職業と年齢を明確に定める。次にシチュエーションを具体的に定める。その上で発生する事件には合理性が必要である。人物の立場や具体的状況を考え、普段の生活で蓄積した知識を総動員してテーマを完成させる。

(2) その過程

目標に対して与えられる授業時間に、日本と中国の差はない。だが、実際の状況はかなり異なっている。中国の学生たちは学内に居住しているが、日本の学生たちは大学で授業を終えると自宅に戻る。そのため放課後に班ごとの稽古をする時間がほとんど取れない。

また授業は毎週定期的（水・木曜）に行われるが、学生が教室に集まれるのは正味90分間しかない。授業の進行には中山が通訳として入るため、桂の指導に使える実際の時間は60分に満たない。学生に課題の意味を理解させ演技をさせる時間は、非常に限られているのだ。そのため授業内容は、極力必要不可欠なものだけに絞らねばならない。

授業では、「最終的な目的は演劇の過程を体験することで自分を豊かにし、自分を認識し、グループ創作の演劇的成果を共有することであり、作品のコンテストではないこと」を何度も強調した。これによって学生たちはかなりリラックスしたようだ。

彼らにとってこのような授業は初めての体験である。主体的に参加するには強い好奇心と恥じらいを克服する努力が必要だったが、回数を重ねるうちに積極性が見られてきた。授業から得るものは珍しさや楽しさだけではなく、生活への観察や自分自身への考察であることを徐々に理解してくれたようである。

異なる学年に同じ授業を行ったが、発表会の班分けについてはその学年の事情を考慮して、学生の意思に任せた。4年次生だけは毎回の出席人数が少なく入れ替わりが多かったので、全員で1班を作ることにした。

今回の授業がなければ彼らは生活のディテールを同級生に見せて相互理解を深める機会などはなかっただろう。生活観察の宿題で起きた印象的な事件を記しておきたい。「あなたが外出するときのお母さんの動作を観察する」という課題についてのできごとである。多数の学生が「自分を起こしてくれる・車で学校に送ってくれる・お化粧をする」お母さんを表現した。とくに男子学生が母親の動作を真似るとクラス中に笑い声が満ち、教室に

はとてもリラックスした楽しいムードが流れていた。

その中である学生が「僕にはお母さんがいません。家事はすべてお姉さんがしてくれます」と語り、お姉さんの姿を真似て見せたのである。その瞬間教室の雰囲気は重くなり、同級生たちの目には変化が生まれた。先ほどまで自分たちが表現してきた生活は、すべて両親の保護のもとで成立しているのだと気づいたようだった。この気づきが学生たちに与えた影響は、非常に大きい。教育演劇の最終的な目標は参加と表現にあり、重要なのはその過程で自分自身を認識することだという意味を教えてくれた一コマだった³。

授業の最終段階では学生はグループに分かれて創作した文学台本をもとに、15分間の小品を発表した。その創作過程は、以下のように進んだ。

第1段階は学生たちの文学的構想を細かくチェックし、私たちが具体的な修正意見を提示することである。台本の構想は文学的ストーリーを作ることから始まり、台本にする過程で全員で討論を行う。お互いの意見を戦わせてコミュニケーションをとりながら最終的に意見を一致させ、台本に完成させる。この段階で、学生たちは文学作品に親しみのある人文学部生らしさを十分に発揮していた。

第2段階は演技をすることである。これは舞台経験のない学生たちにとってかなり難度が高い。だが桂はこの段階で予見できる表現上の問題点について厳しい要求はせず、「学生が自分の考えを表現する」ことに重点を置いた。今回最終的に完成した作品は、いずれも100%学生たちが考えたものであり、私たちによる修正は入っていない。小品の上演時間は5分から16分10秒だったが、表現方法についても基本的に学生が考えたままである。

5. 上演発表会について

演劇ワークショップの成果である上演発表会は、3年次生は6月1日（水曜日）に、2年次生は翌2日（木曜日）に行われた。いずれも座席数290席のマナビーホールで、それぞれのゼミの授業時間を使い、延べ8組が上演を行った。内訳は、3年次生が4本（『男と女』『今日、漫才やめます』『名作アナザーストーリー』『信頼学校』）、2年次生が3本（『新説 新撰組 ～動乱の意志～』『桃太郎 後日談』『きび団子に誘われて』）、4年次生は1本（『信頼』）である。

2年次生の作品はいずれも闊達で、豊かな創造力と熱意を感じさせた。とくに『桃太郎 後日談』はスーツを着たイヌ、キジ、サルが現代のオフィスで就職の面接試験を受けるというアイデアがたいへん面白かった。『新説 新撰組～動乱の意志～』は殺陣の動作と音響で、スピーディな舞台を目指していた。

3年次生でもっとも光っていたのは『信頼学校』である。偏差値ではなく友人からの信頼度で将来が決まるという近未来を舞台に学校生活を自然に表現し、「信頼」というテーマを深く掘り下げていた。また出演者がもって出たケータイで学校のチャイムを鳴らし、臨場感を盛り上げた。

リハーサルのために授業2回分を割いたが、2,3年次生はどのグループも作品作りを楽しみ、充実した時間を過ごしていた。また休憩時間や休日を利用して稽古しているグルー

プもあり、安心して見ておれた。

心配だったのは、4年次生である。時期的に就職活動や教育実習などに忙しく、毎回集まれるメンバーが異なる。出席者が10人に満たないこともしばしばだった。私たちは「これでどうやって作品を作れるのか？」と気をもみ、「この授業は4年次生にとって迷惑だったのではないか」とも考えた。欠かさず出席する数名の熱意とスーツ姿で大汗をかきながら駆けつけるM君の存在が心の支えだった。だが発表会当日、私たちはおもいがけず彼らの底力を見ることになった。

4年次生の『信頼』は浮気を疑われたカップルをめぐる、友人達が模擬裁判を行うという内容をキャスト5人、スタッフ9人で演じた。暗転回数をできるだけ減らし、効果的な音響と衣装（かつら）でまとまりのある舞台を見せた。台本の構想には文学的才能が感じられ、エンディングまできちんと考えられていた。作家のIさんがぎりぎりまで台本を練り、授業に参加できなかった学生達も本番には参加したいとスタッフワークに励んでいたことが上演後に明らかになった。

授業では身体を動かすことから始まり、ストーリーを作り、動きとセリフで表現することを学んできた。しかし時間の関係で照明、音響、舞台美術、衣装などのスタッフワークについてはほとんど指導せず、すべて学生に一任していた。桂から前もって、「全員が何らかの形で作品作りに参加すればよい。美術や照明を担当する人がいても、もちろんかまわない」と伝えていたが、演劇素人の集団に照明や音響の効果が理解されていたとは言いがたく、本番では暗転が作れずに上演効果を減じてしまうチームが続出した。そのなかでは4年生の作品がもっとも総合芸術としての演劇を体現していたといえよう。

わずかな年齢の差がこのような視野の広がりに影響することを知ったのは、私たちにとても大きな収穫であった。4年次生にとっても、この授業が何らかの収穫と良き思い出を残したことであろう。しかも彼らの功績はこれだけでは終わらなかった。そのことについては、最後に触れる。

6. 振り返り

(1) 日本人大学生の教育演劇ワークショップに対する態度

私たちの共同研究は、今回で3度目である。今回は授業時間に余裕があったので、授業が始まってからも常に修正を行い完璧なカリキュラムを検討した。授業を通して日本人大学生の考えや習慣について理解を深めることができ、異なる国の教育を背景にして実際的な比較ができたことは桂にとって大きな収穫であり、中山にも多くの発見があった。

第一に、実際の教育課程の中で日本人大学生は、中国人大学生よりも注意深く真剣だった。彼らは授業で行う演劇的ミッションに対して、適当に楽しんでおこうといういいかげんな態度をけって取らない。つねに全身全霊を込めて、すべての要求に応えた。その過程で遭遇する様々な問題にも、みんなで力を合わせて解決しようと努力するのだ。

第二に、日本人学生はこれまで考えたこともないミッションに対しても、つねに自分なりの考えを深めようとし、一方的に受け入れて終わりにすることはなかった。これは彼ら

が自分で思考し選択し疑いを抱く精神を堅持しているということで、たいへん得難く貴重なものだ。

第三に、日本人学生はいったんグループの目標が設定されると、一致団結して達成に向けて力を尽くす。どの学年も前週のリハーサルでは全員が台本を手に舞台上がっていたのに、本番ではまるで別人のような演技を見せた。学生たちは主体的に学校に集まって稽古をし、本番では最高のパフォーマンスを見せたのである。

第四に、演劇ワークショップの過程は学生たちの健康的な成長に対して、何ものにも代えがたい作用を及ぼす。彼らがこの授業形態を気に入ってくれたことが発表会終了後に明らかになった。発表会の終了後、2年次生と3年次生が自ら「今学期が終了する前にもう一度演劇創作のチャンスを与えてほしい」という要求を出すことになったのだ（後述）。十分な稽古時間がとれないことを心配したが、実際にやってみると学生たちの演劇授業に対する熱愛ぶりは日本と中国で違いはなかった。演劇が若い学生たちの知恵と自信が育てたのだと考えている。

「課題に対して全員でまじめに取り組み、自分たちなりの考えを深め、力を合わせて最高のパフォーマンスを見せる」とは、理想的な学生像ではないか。今後も学生に「知恵と自信を育てる機会」を提供するように心がけたい。

(2) 学年による差異

ワークショップの教育効果が学年によって差異があるのか、あるとすればどのような点か、について考えたい。上述したように就職活動で欠席者の多い4年次生にとって、15回の授業時間内だけで上演作品を作り上げるのはかなりの負担となる。3年次生はすでに半年間同級生として過ごしているので最初から打ち解けており、毎回の授業が実に楽しそう、団結力がいっそう強まったようだ。またメンバーのことがよく分かっているのも、作家担当のT君はそれぞれにセリフをあて書きをし、俳優の魅力を引き出した。2年次生では3人がこの授業をきっかけに演劇のおもしろさを知り、後期の「文学・文芸実習Ⅲ」で台本を書く勉強を続けた。また「その後のゼミ選びにもつながった」「表現力を鍛え、人前で話す自信がつくこの授業を、一年でも早く受けられて良かった」という意見もあった。

けっきょく2年次が良いのか3年次が良いのかについては、今年度の試みだけではまだ結論が出せないでいる。次の機会に持ち越して検討したい。

(3) カリキュラムの持つ意義

今回のゼミ生には2年次に演劇部員が一人ただけで、これまで演劇という形で自分を表現したり、自分以外の役柄に扮した経験をもつ学生はほとんどいなかった。学生たちは表現練習の基礎から演劇を体験し、表現を理解し、最終的には役柄を創造し、作品を作り上げて大きな舞台上で上演した。その過程で彼らは自分の考えを表現してきたのである。

このような授業は日本の大学教育の中でもたいへん珍しく、その意味では教員にとっても学生にとっても貴重な経験になった。そして確認できたのは、教育演劇の授業は一般の

文科系大学生にとって大きな教育的効果をもつということだ。身体行動による演劇は、集団創作を通して彼らに自分を認知する力——自信、コミュニケーション、表現、協力——を獲得させる。カリキュラム全過程に参加した学生たちにとって、今回の授業が忘れがたいものとして一生記憶されることを確信している。

7. おわりに

発表会の翌週、2, 3年次生の授業では上演の振り返りを行った後に、4年次生の上演をビデオで鑑賞した。ちょうど前期の前半が終了したところであり、残りの時間を使って後半の授業内容について学生たちと相談する予定だった。ところが予想に反して、いずれの学年でも「もう一度やりたい」「もっと人数を増やしてやりたい」「新しい作品を考えたい」という要望が続出したのである。4年次生のビデオに触発されたのか、「照明も音響もつけて演りたい」という声も上がった。3年次生はすぐに「『信頼学校』を練り直して全員で演りたい」と意見がまとまった。2年次生にいたっては、その場で演出家志望が2人名乗りをあげ、同級生をそれぞれのチームに振り分け始めたのだ。

本学に勤務した20数年間で、中山は人文学部の学生がこれほど熱烈に自分の意見を言い積極的に要望を口にすることを見たことがない。初めてまのあたりにした彼らの熱意に、感動を禁じ得なかった。

相談の末、前期の最後にもう一度発表会を行うことになった。そして7月25日、再度マナビーホールで3年次生が1本、2年次生が2本の作品を上演し、120名を超える観客を集めた。第1回の上演よりもはるかに充実した発表会となったが、これについては稿を改めたい。ただ、2度の発表会を通して、「演劇は学校教育をサポートする力を持つ」という平田オリザ氏の言葉が「信頼」に足るものだと実感したことをここに記して拙論を終えたい。

資料

第3回授業のコメントシート集計（総数42人） 今回のワークショップについて

【1. もっとも面白かったものはなにですか？】

2年（14人）：⑦3 ⑧0 ⑨1 ⑩9 ⑪1人

3年（17人）：⑦0 ⑧5 ⑨1 ⑩9 ⑪2人

4年（11人）：⑦1 ⑧1 ⑨2 ⑩7 ⑪0人

【2. もっとも難しかったものはなにですか？】

2年（14人）：⑦2 ⑧1 ⑨7 ⑩3 ⑪1人

3年（17人）：⑦6 ⑧7 ⑨4 ⑩0 ⑪0人

4年（11人）：⑦0 ⑧0 ⑨9 ⑩1 ⑪1人

【3. 困ったことがあれば教えてください】 抜粋。無回答は「なし」に含む

2年：・相手が動いてくれない・鶴の動きがわからない・授業時間の延長・なし10人

- 3年：・鶴の動き・授業時間の延長・想像力・恥ずかしさ・身体が動かない・なし 11人
4年：・面白い発想ができない・人が揃わない・リズムをとれない・なし 5人
- 【4. 発見があれば教えてください】 抜粋
2年：・恥ずかしくなかった・仲良くなるには同じ目的や目標があるとよい
3年：・同じ動作でも人により違う・意外と動けた・演技によって別のモノが見える
4年：・自分の観察眼の乏しさ・洗顔1つでも個性が現れる・創造力の重要性
- 【5. 自分の意見を発言できましたか?】
2年 (14人)：できた12人　できなかった　2人
3年 (17人)：できた14人　できなかった　3人
4年 (11人)：できた10人　できなかった　1人
- 【6. 友人との関係に変化はありましたか?どのような変化ですか?】 抜粋
2年：女の子と話せるようになった・他の授業で会っても話せるようになった
3年：家族のような雰囲気になった・自分のできないことが他人にでき、その逆もある
4年：距離が縮まった・素で接することができるようになった・チームワークができた

第4回授業についてのコメントシート集計 (総数 36人)

- 【1. もっとも面白かったものはなにですか?】
2年 (12人)：⑫0 ⑬0 ⑭0 ⑮2 ⑯10人
3年 (16人)：⑫0 ⑬0 ⑭1 ⑮1 ⑯14人
4年 (8人)：⑫1 ⑬0 ⑭0 ⑮0 ⑯7人
- 【2. もっとも難しかったものはなにですか?】
2年 (12人)：⑫1 ⑬0 ⑭0 ⑮1 ⑯10人
3年 (16人)：⑫0 ⑬0 ⑭1 ⑮0 ⑯14 なし1人
4年 (8人)：⑫0 ⑬0 ⑭0 ⑮0 ⑯8
- 【3. 困ったことがあれば教えてください】 抜粋。無回答は「なし」に含む
2年：・自分に発見がなさ過ぎる・メンバーに欠席者がいた・なし 9人
3年：・表現が伝わらない・母のまね・限られた言葉でストーリー構成・なし 13人
4年：・人数のバラつき・表情や動作・限られた言葉でストーリー構成・なし 1人
- 【4. 発見があれば教えてください】 抜粋
2年：・1単語で演じる難しさ・どんなに無理と思っても、何とかなるものだ。
3年：・まったく関連性のない言葉でも芝居ができる・これまで母をみていなかった
4年：・演じるのは難しいけど、楽しい・積極性が大事・細部を表現することの難しさ
- 【5. 自分の意見を発言できましたか?】
2年 (12人)：できた9人　できなかった　3人
3年 (16人)：できた15人　できなかった　1人
4年 (8人)：できた7人　できなかった　1人
- 【6. 友人との関係に変化はありましたか?どのような変化ですか?】 抜粋
2年：・今まであまり話すことの無かった人とも話すようになった・笑顔が増えた

3年：・以前より仲良くなれた・一体感が増した・居心地がさらに良くなった。

4年：・意見を言い合って、想像力を膨らますことができた。・以前より仲良くなれた。

本論文は、JSPS 科学研究費 JP15K04268 の助成を受けた研究の一部である。

〔注〕

- 1 「平田オリザコミュニケーション教育を語る」内田洋行教育研究所 学びの場. Com
<http://bit.ly/2kJ6IJx>
- 2 同プロジェクトの詳細は以下のサイト参照。<http://hato-project.jp/hue/project/p3.html>
同プロジェクトに先立ち北海道教育大学では文科省の特別経費を得て2011年から3年間「富良野GROUPと連携した演劇的手法による教員養成課程の学生並びに現職教員のコミュニケーション能力育成プログラム開発」というプロジェクトを実施した。その成果報告書『教師になる劇場』は上記サイトで読むことができる。また、川島裕子・柴木邦也「演劇的手法によるコミュニケーション教育の学びの『テーマ』」北海道教育大学紀要。教育科学編 66(1):161 - 176 2015は上記報告書にさらに加筆がなされている。
- 3 長期の一人っ子政策により小皇帝と称されるわがままな子供たちが増加している中国では、母親観察による自分への気づきは教育的意味があると考えられる。だが、個人情報に厳しい日本の大学で行うことがふさわしいのだろうか中山は判断しかねている。「母親」を「家族内でもっともあなたに近い人」「主に家事をしてくれている人」と言いなおす配慮が必要かもしれない。

〔参考文献〕

- [1] 中山文・伊藤茂・桂迎（2008年）「心のコミュニケーションを創造する演劇教育空間について——神戸学院大学及び関西地区高校演劇部におけるワークショップの記録と思考」人文学部紀要 28号 1 - 19
- [2] 中山文・桂迎（2013年）「ゼミ教育における演劇ワークショップの実践と効果——黒白劇社指導者桂迎教授をお迎えして——」教育開発センタージャーナル第4号 17 - 31
- [3] 佐藤信（2011）『演劇教育とワークショップ——学校という劇場から』論創社 174 - 195
- [4] 高山昇「“演劇を学ぶ”ということ～創作脚本上演の授業」
- [5] 渡部淳+獲得型教育研究会（2014）『教育におけるドラマ技法の探究—「学びの体系化」に向けて』明石書店 9 - 34 渡部淳「獲得が田中弥生教育とドラマ技法研究」
- [6] Jun Watanabe(2011) "An Adventure around Educational Methods: for Application of Dramatic Activities" Educational studies in Japan : international yearbook : ESJ (6), 33-45